

裏方の深想 プルビチャチュ世界初登頂 42 周年記念集会

OWCC 中川和道 20240317

この記念集会(3月10日、[1])が成功裡に終わった今、裏方として活動したこの5か月を思い返して思うところを記しておこう。公式な記録はあとにして、これだけは、今、書きたい地声だ。

直接のきっかけは安田一郎隊長からの打診ではあった。が、中川の心には深い思いが通奏低音のように響いており、これがお引き受けの動機となった。それが何かを明確にはまだできないのだが、古くからの仲間や先輩の岳人たちが次々と他界されていく寂しさもそのひとつだ。労山会長を務めた守屋益男さん、高橋伸行さん、大阪府連会長だった上村諭さん、兵庫の原水章行さん、「平和と登山」の松島正光さん、ナイロンザイル事件の石原國利さん、日本山岳会科学委員会の中村純二先生、・・・すべての思い出が、今は寂しい。

私はじめ老人の位置づけは「枯れ木も山のにぎわい」が通常だ。上記の方々の去り際を見て、中川は、枯れ木がただ消えていくのではない何かはないのか？と常々思っていた。11月18-19日のOWAFクラブ交流会でも「古い人」と呼ばれ、思い続けてきた上記のことは口に出せなかった。

そこに安田さんからプルビ記念行事の話が来た。そこで思った。枯れ木に火をつけたら、どんな燃え方をするのだろうか？どんな光を放つのだろうか？それは周囲にも有意義な光なのだろうか？火はうまく飛び火するのだろうか？燃え盛るのだろうか？

プルビ初登頂は普通のアルパインクライミングではない。6000mの標高で人工登攀でルート工をしたのだから、登攀の課題としても右翼的で面白い。そこを突破した強烈な個性たちに相まみえるのだと、発起会12/14を中川は恐る恐る迎えた。現れたのは、何と、柔和なおじいさんたち。今は昔、山とのぎすぎすした切り結びはちっとも出でこない。第一、許せないことに、登山報告書「プルビチャチュの蒼い氷」を読み直してやってきた形跡がない。隊員トークの可能性を探りたいとの安田隊長の提案に「安田さん、こりゃ、だめだよ」との言葉が中川の頭を何度もよぎった。

転機は、飲み会で訪れた。彼らは、現代から見たプルビ初登頂の位置づけを思いのほかきちんと考えておられたうえに、当時の具体的なことごとの話になると、何と、少女のように目が輝くのである。「いい人生を送らせてもらった」「思い出すと力が沸き上がる」、これだな、と思った。登山の具体像が、小出しに小出しに、まぎれもなく鮮やかによみがえってくるのが分かった。

それ以来、毎回の飲み会での発言を帰宅して直ちにメモし、安田さんと議論を交わした。「中川さん、台本作って黒柳『徹子の部屋』をやりなはれ」と藤川櫻彦さんが言い出した。発想の豊かな方だ。その日から、にわか台本作家・中川の苦悩が始まった。必死で作った台本を事前に送り、読み合わせ稽古をした。今度は、何と、目が薄く台本が読めないくせに老眼鏡をかけて来ない。またまた、読んで来ない。あーあ。そのくせ、やる気にあふれている。何よりも、むちゃ明るい！

そのうちに西岡孝さんがプロの才能で、あのきれいなポスターを作った。長く連絡がつきにくかった小川史人さんから330枚660MBものデジタル化写真がもたらされたのが3/2。何と、本番の1週間前だった。ひえ～だ。

こうしてたどり着いた本番3/10は、中川の人生にも輝かしい贈り物くれた。登山隊のみなさん、ありがとう。記念講演を下された近藤和美さん、ありがとう。連盟執行部のみなさん、ありがとう。労山やって良かった・・・。

[1]大阪労山ニュース2024年2月号。

